

# おとまち千住の縁

http://aaa-senju.com

「アートアクセスあたち 音まち千住の縁」(通称「音まち」)は、アートを通じた新たなコミュニケーション(縁)を生み出すことをめざす市民参加型のアートプロジェクトです。足立区千住地域を中心に、市民とアーティストが協働して、「音」をテーマにしたまちなかライブ、ワークショップ、トークイベントなどを展開します。

## 明けました号

「千住タウンレーベル」構想の背景にあるディレクター・アサダワタルの頭の中は次ページで覗いてみることにしよう……。

全13トラック・約40分のレコードには、千住の音が詰まっています。2016年11月から活動を続けてきたタウンレコーダーたちは、これまで「この」ことに集中してきた。自らお店と交渉してポッタの音を録ったり、まちなかで何人にもインタビューしたり、自宅のベランダで試行錯誤しながら周囲の音を録音して、初めて使う編集ソフトにも四苦八苦しながら思いやりの音をきゅと詰め込んで数分ずつの音源をつくりあげた。それがついに「音盤千住」というレコードになった(非売品)。

# 音盤千住

ついに目見え



## 音盤千住

公募で集まったタウンレコーダー(音の記者)たちが独自の関心のもと、まちを取材し、トラック(音作品)を制作した。千住の変化にまつわる住民の思い、千住に残る芸能、市場や商店で鳴り響く高い声、変わらぬ食文化、路線が拡充してゆく鉄道の音、いずれ消えゆく場に立ち現れたかけがえのない人のつながりなど、さまざまなまちの「記憶/記録」が収録されている。見開きのジャケットは冊子型で、テキストと音盤(LPレコード)が一体となっているのが特徴だ。初回プレスはたった100枚。次の1年をかけて、誰とどこで聞こうか? ということをみんなで考えていく。

ディレクター：アサダワタル  
アドバイザー：大城真(サウンド)、後藤寿和(デザイン)  
グラフィックデザイン：Donny Grafiks

とにかく、「音盤千住」の本領発揮はこれから。この謎のレコードをいかに使いこなすかで「音盤千住」の面白みがある。タウンレコーダーたちは、まちを素材に音で遊ぶ達人になりつつあるが、今度はその遊びを、まさに「遊して」いく。日々の暮らしが、「音」を通して少しだけ色づいて感じられるような仕掛けをたくさん考えていきたい。千住タウンレーベルは、今後も「つくる」「試みを続けながら、まさに「届ける」取り組み、さらには遊び方、楽しみ方を広げる活動をいよいよスタートする。

- 1 音盤千住 Vol.1 ついにお目見え!
- 2-3 千住タウンレーベル アサダワタルの思考めぐり
- 4-5 千住だけじゃ音楽祭「かげきな影絵オペラ」をベラっとご紹介
- 6 千住・縁レジデンス「茶MUSICA」メモリアル 1日だけのティーンズ楽団



# おとまちかわらばん



千住の人紹介 8 鶴巻俊治 つるまきとしはる 会社員/北千住「島」プロジェクト 管理人

## 千住の人紹介 8 ざわざわ揺れる千住という「島」で

### 向かいのお宅で1時間

足立区に暮らし始めたのは千住育ちの妻との結婚がきっかけです。新潟で育ち、大手建設会社に就職して東京に出てきて、当初は流行の先端に憧れ自由が丘に通ったりもしましたが、東京っ子の妻が思いのほか地に足がついているのに惚れたので、住むなら東京の西側でなく東側がいいと思ったのです。

千住には2003年から暮らしていますが、週末ごとにイベントがあったり、「町雑誌千住」(タウン誌)がとても面白かったり、まちに出ると何かハプニングがあるし、千住っていいなあ。近年では、家の近くにあった音風屋(※)の「未来楽器図書館」も楽しかった。2006年には、千住の柳原に自分の設計で家を建てました。よそ者がまちに入っていくことにすごく不安もありました。それが、引っ越して何日も経たないうちに、当時小学生だった子供たちが、路地を挟んだ向かいのお宅に上がりこませてもらって、1時間も帰ってこなかった。最初はちょっとためらいも感じたのですが、その後もいろんなお宅に上がりこんで、まちのみなさんにかわいがっていただいた。親がなじむ前に、子供たちがなじんじやって(笑)。それに、桜祭りのときに踊る人や並木道でサッカーやキャッチボールをやる人が家から見えて楽しくて、引っ越して本当に良かったなあと思います。

### 千住を「島」と妄想する

仕事ではタワーマンションなど住宅の設計が多いのですが、短期間で収益性の高いものを求められ、じっくりとまちと向かい合い、長い時間をかけてまち全体の細かい個性を考えることは少ないんです。自分のような建築屋は、本当はまちのことも考えて「こうしたほうが良いのではないか」と話をしたいと思うのですが、サラリーマンとしてお客様の要望に合わせざるを得ない場面もあったりする。そのことに矛盾を感じ始めていたころ、千住ではいろんな人がそれぞれ楽しそうにやっているのを見て、まちへの関わり方、まちを良くする手法はたくさんあると感じたのです。

そんなとき出会ったのが音まちの「イミグレーション・ミュージアム・東京」(以下、IMM)です。音楽はあまり得意じゃないのですが、市民参加型で自分も主体的に関われると思い、2013年から参加しています。知らないメンバーと一緒にまちへ出てアート作品をつくるというのがものすごく新鮮でした。ただ、子供3人がまだ小さくて、奥さんひとりに世話を願っているわけにもいかず(笑)。2014年から「北千住「島」プロジェクト」(以下、島プロ)をひとりで始めました。千住って隅田川と荒川に挟まれた特殊な形をしていますよね。このまちを「島」と妄想すると面白くなりそうだなと思って。まず、路地を巨大迷路に見立ててすべての道を歩く企画を始めました。毎週日曜の朝、決めたエリア内を一筆書きで歩き尽くす。それをFacebookで報告していきました。「島」の外周部など、住んでいる人しか行かないエリアもたくさんあるのが、ミステリアスだなと思います。

### 仕掛ける側に加わる楽しさ

最初にゴール設定した企画はだいたい終わりましたが、島プロをやっていることで声をかけていただきまちを案内する機会もできたり、人と出会う接点になっています。自分の田舎ではイベントは年に1、2回しかなかったこともあって、いつもざわざわ賑やかで、楽しいことが盛りだくさん千住を見ていると「島が揺れる!」「沸騰してる!」と感じます。すごく好きですね、千住。音まちは、そこを舞台に駆けずり回っているイメージ。常に何かを仕掛けて、何かが起こる起爆剤ですね。その仕掛ける側に加わるってことが幸せです。

2016年のIMMでは、フィリピンの方々にインタビューして「住まい」について冊子にまとめ、展示しました。話したくないという人もいて、大変でしたけど(笑)。あるフィリピンのお宅では、帰ると知らない人が家に上がり込んでコーヒーを飲んでいるようなことが日常だとか、キッチンが2つあってひとつは他人が立ち入れない通称「ダーティキッチン」と呼ぶのだとか、住まいを通じて文化や習慣を知ることができ、すごく面白かったです。わからないままでいるより、違いをお互いにわかっているほうが、より豊かになれるよね。

※ 音風屋：柳原の商店街に面した、元豆腐屋だった空き店舗で、2012年～2013年、音まちの活動拠点としていた。「未来楽器図書館」は、気鋭のアーティストが提案する、見たこともない楽器に触れられる場としてまちに開いた。

### Profile

新潟県加茂市生まれ。屏風職人の家庭で育つ。新潟県立加茂高等学校(建築計画)卒業。2009年より千住在住。3児のパパ。2013年から「イミグレーション・ミュージアム・東京」に参加。2016年度の千住・縁レジデンス「知らぬ路地の映画祭」の上映作品「マルル☆キルル」にも出演。今後は、足立のまちづくりを考える「AB+あだちブレインプラス」に参加予定。



千住タウンレーベルの取り組みに、  
 一見（一聴？）とても掴みどころのない印象を持たれるかもしれません。  
 「まちの生活を音で記録し、表現することの意味は？」  
 「そもそもこれは音楽なの？ドキュメントなの？」などなど。  
 ここで個人的な背景を少しばかり。  
 僕には、  
 2000年代からライブハウスやクラブなどで活動を行ってきた  
 ミュージシャンとしての立場、  
 同時にいくつかのNPOに関わりながら、  
 全国津々浦々の地域コミュニティに携わってきた活動家的な立場、  
 そして書籍やウェブなどのメディアを通じて  
 「表現によってできる面白い世直し」の可能性を発信する文筆家としての立場、  
 これらがぐちゃぐちゃと混在する背景があります。  
 この特異な経験から僕は、以下のような思いを強くしてきました。

人と人とのつながりが希薄化したと言われるこの日本社会で。  
 かつ、音楽メディアの出版が産業として課題を抱えるこの日本社会で。  
 音楽をコミュニティの中で創造的に使いこなし、新たな縁を紡いでゆきたい。  
 その手立てを愚直に積み上げ、言葉にし、各地へ伝えていきたい。

ですからこの活動は、  
 音で、音楽で、この千住のまちに新たな縁を紡ぐ、  
 そのひとつのカタチとしてみなさんに楽しんでいただき、  
 そしてここから大切ですが  
 「実際にこの音盤を使って、まちでさまざまなつながりを生み出す」ことへと、  
 活動を広げていきたいと考えております。  
 その具体的なアクションとして、  
 1月に千住エリア各所で「聴きめぐり千住！」を開催します。  
 取材から得た出会いのはじまりは、さらなる出会いの入り口。  
 そのドアと一緒に開けて、千住のまちから、不思議で愉快で、  
 でもじんわり深い音楽的日常を世界へ広げていきませんか？

最後に、タウンレコーダーの取材に快く応じていただき、  
 制作にご協力くださった千住の住民の方々に、  
 そのほか関係各位に心から御礼を申し上げます。

アサダワタルの  
 思考めぐり

# 音と記憶

## 釜ヶ崎街頭テレビ『カマン!TV』



2009-11年、大阪

テレビモニターを設置し、主に釜ヶ崎で生活をする比較的高齢層のおじさん、おばさんたちの「記憶と会話を想起させるための番組プログラム」を週替わりで編成・上映した。

## 『KPPL 借りパクプレイリスト』



2012年、大阪

借りたまま返せなくなったCDを100枚集めて、誰から借りたか、どうして返せなくなったかのエピソードを取材。1枚1枚にポップを貼って、試聴機で聴けるように展示した。

## 歌声スナック『銀杏』

福岡県北九州市、小倉にある「銀杏」。ここに集う同窓会現場に、経営者（ママ）・入江公子のユニークな実践「校歌のオリジナルカラオケ映像の制作」が差し挟まれる。集団凝集性の高いコミュニティで、校歌斉唱だけでは生まれ得なかったコミュニケーションがデザインされていることを博士論文で考察（2016年）。



# 音と人

## 『住み開き』



2009年-、全国

「住み開き」とは、自宅を代表としたプライベートな生活空間や、個人事務所などを、本来の用途以外のクリエイティブな手法で、セミパブリックなスペースとして開放している活動。もしくはその拠点のことを指す。

# アサダワタルの 思考めぐり

# 音とメディア

## 『朝日ソノラマ』

朝日ソノプレス社として1959年に創業した、かつての出版社。ニュース記事などさまざまな話題に、現場のインタビューやオリジナルの録音テープ、音楽などをソノシート盤（薄い樹脂でできた柔らかいレコード）として収録した「月刊 朝日ソノラマ」を発行。当時、音の出る雑誌として脚光を浴びた。



## 『蓄音機屋』

明治時代には、街頭でお金をとって蓄音機の音を聴かせる商売をする「蓄音機屋」がいた。家庭用として普及するまでこのような光景が見られた。



## 『演奏家』活動

ソロでは歌とサウンドスケープが渾然一体となったCDアルバム『歌景、記録、大和川レコード』をリリース（2015年）。またドラマーとして参加する「SJQ/SJQ++」では、音を軸としたメディアパフォーマンスを国内外で発表。



2016年、福島

## 『ラジオ下神白』

福島県の復興公営住宅 下神白団地で、住民と住民をつなぐメディアとして、まちの記憶と馴染み深い音楽をインタビューした「ラジオ下神白」を実施。CDというかたちで全戸個別配布され、リクエストも受け付けている。



## 『サウンドスケープ』



「音の風景」を意味する概念として、カナダの作曲家マリー・シェーファー（1933年-）が1960年代に提唱。風や水など自然の音や、騒音・人工音など、社会や日常生活をとりまく音環境を「文化的事象／音の文化」としてとらえ、人々の耳をさまざまな音に開きかけをつくった。

# 音と日常

## 『門付け』

旅芸人として、家々を一軒ずつ訪問し、門前で替女歌（ごせうた）を歌う。膝を曲げて三味線を支えるのが、立って演奏するときのスタイル。  
 写真提供：鈴木昭英



## 門司港の『バナナの叩き売り』



台湾から港に大量に荷揚げされ、輸送中や加工中に熟れたり不良品となったバナナを、門司港で露天商が軽妙な口上で売りさばいたのがはじまり。2017年「関門“ノスタルジック”海峡」構成文化財として、日本遺産に認定（文化庁）。

レコ発企画  
 「聴きめぐり千住！」  
 レコード片手にまちをめぐる  
 平成30年1月21日(日) 11:30-18:30

千住のまちなかに散りばめられた「音盤千住 Vol.1 -このまちのめいめいの記憶／記録-」のトラックの数々。1枚のレコードに収録されているのだから、そのままプレイヤーで聴けばいいのに、地図を頼りにわざわざあちこちをめぐるないといけないってどういうこと!? 千住タウンレーベルは、このプログラムを通じて、新しい音の聴き方と遊び方を提案します。  
 \*詳細は7面へ